

もっと知りたい ふるさと

14

更級の遺跡幅田・円光房と

縄文祭のはじまり

はばた えんこうぼう

冠着山麓北斜面標高六五〇メートルの林道切り通しから樫葉遺跡が昭和三十八年に発見された。同遺跡は縄文中期初頭五五〇年前、関東地方の五領ヶ台式の影響を受けた諏訪郡梨久保式と、中越地方剣野B式文化が北陸よりこの地で融合したと考えられ、千曲市では唯一貴重な遺跡である。彼らは堅果類などの「水さらしアク抜き」の加工技術を持ち、次の縄文中期中葉の水煙渦巻・王冠・火炎土器を拝した勝坂式五〇〇年前の文化に継承される。これは雄沢川下流域の

幅田・円光房遺跡の動態を詳しく説明する上でも極めて重要である。

昭和三十八年、このテーマを解明する上から幅田遺跡の発掘調査が行われ、続いて昭和六十二年圃場整備に伴い、円光房遺跡の大発掘調査で両遺跡は一体であることが確認された。残念だが勝坂式土器は見つからず、文献に仙石地区と三島平B遺跡で九段地下から把手や破片が出土した記録がある。つまり、同時期に大規模な土石流等で勝坂式は埋没したのだろう。

四五〇〇年前頃、幅田・円光房に縄文中期後葉の加曾利E式の集落が定住し始める。更級の里古代体験パークの古代住居は円光房より出土した柄鏡形敷石住居址を移設し復元したものだ。資料館には土器・土偶・石器類等出土した品々が展示されている。

更級の里縄文祭の始まり

堅果類のアク抜き加工技術・魚類や動物肉の燻製技術は安定



立石(男根石)の祀り(送り)初期縄文まつり後の豊穰儀式式
[さらしなの里歴史資料館提供]

この遺構の中は、石器・土器・動物の骨・人骨(多分亡くなった幼児の骨)などが投げ込まれた大きな焚き火をして天高く昇らせた「英霊の送り場」だ。しかも配石遺構南端の立石は先祖がたどって来た樫葉遺跡の方向を拝し、一辺は冠着山の峯に面し、英霊を送り再生を祈る。

平成五年より行われている縄文祭の豊穰儀式は、当時の幻想的な焚き火「送り」儀式と火の場面を想像して作り上げた祭り、今風にアレンジされて行われている。詳細は更級の里縄文まつり実行委員会「里にいやされるさらしな」に紹介されている。

戸倉史談会常任幹事

大橋 静雄

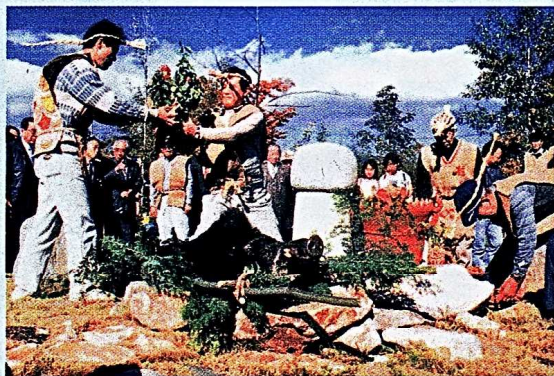


縄文中期後葉曾利II式土器
円光房遺跡
[さらしなの里歴史資料館提供]



縄文中期初頭土器
樫葉遺跡
[県立歴史資料館提供]

した生活と人口増加につながった。当然ながら様々な疫病が発生する。これを鎮めるために呪術や再生術などの祭事を行ったようだ。最も特長的なのは、配石遺構・立石・埋設土器だ。幅田第一号配石遺構は甕形土器の底部を抜き、逆さまに埋設して石皿で蓋をしてある。甕の中は胎児の胎盤が納められ、家族がその上を踏めば丈夫に育つ占いだろう。幅田第二号方形配石遺構の南端にある立石の側には死亡した幼児の遺体だろう。



縄文中期後葉幅田遺跡2号方形配石遺構